

1-1

## コーチング学習が看護学生に与えた影響

井上清美

【目的】看護基礎教育課程学生の対人関係スキルであるコミュニケーション能力を高めるため、コーチング技法の有効性に着目し、コーチングを活用した標準的学習プログラムの作成と学習効果の探索を目的とした。【対象】協力の得られた看護学生（1年生）【方法】①看護学生用のコーチング学習プログラムを作成した。②コントロール群を設定して、作成した学習プログラムによるコーチング教育介入を行い、学習効果の検証を行った。【倫理的配慮】所属大学の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。【結果】(1)基本的なコーチング技法を活用して、1回90分、6回コースを実践し、実践結果を振り返りながら、標準的学習プログラムを作成した。(2)効果検証は、EQ簡易質問を用いて、教育介入群、コントロール群の両方に、介入前、介入終了直後、終了後3か月後の3回実施した。コーチング群20人、コントロール群19人において、Salovey-Mayerモデルの4つの項目のうち3つ、感情の識別( $p=0.001$ )、感情の理解( $p=0.001$ )、感情の調整( $p=0.007$ )で、コーチング群とコントロール群に差が認められた。感情の利用( $p=0.129$ )では、コーチング群とコントロール群には、差は認められなかった。

(本研究は、平成23～26年度科学研究費補助金で行われた共同研究(代表井上清美):共同研究者:森谷満(北海道医療大学)川島美保(日本赤十字豊田看護大学)野村美千江(愛媛県立医療技術大学)高田和子(国立健康・栄養研究所)の一部である。)

1-2

## 訪問看護師にとっての対応困難事例の困難の要素に関する研究

武ユカリ

金川治美 小坂素子 西出順子

【背景】訪問看護師(以下訪問Ns)は訪問看護サービス利用者の医療面と共に、生活に関わるあらゆる面から援助する役割がある。個性が高く様々なニーズがあり、対応が難しい利用者や家族に遭遇することもある。

【目的】困難事例への個別面接調査から訪問Nsにとっての対応困難事例について困難要素を検討する。

【方法】訪問Ns12名を対象に対処困難な事例について個別面接調査を行い、録音データからテキストデータを作成し、テキストマイニングソフト(TMS)により分析した。辞書の整備をして分かち書きを行い、頻度解析、注目解析、評判分析、原文参照を実施した。平成24年8月本学研究倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】評判分析と述語属性フィルタでネガティブの単語頻度集計し、人物別でカテゴリ化を行った。単語種別数4158語で4分類、18カテゴリーに分けられた。以下は分類とカテゴリー例である。①訪問Ns(6):訪問Nsの対応、訪問先状況等、②家族(6):訪問Nsへの対応、家族の認識、③利用者(4):利用者の状態、満たされない欲求等、④その他(2):医師の説明等。

【考察】訪問Nsが困難と認識する要素として、暴力の介在、サービスに対する理解不足等の他、多様な要素があり、訪問看護師の困難事例についての認識の一部を可視化できた。今後、この分析結果をもとに要素を分類化して、対象を拡大し調査を行う必要がある。